

「イメージを持つこと」の効果と可能性

—ある学生のピアノ演奏指導の事例から—

Effects and Possibilities of “to have an Image” : In the Case of Piano-Lesson
for the Certain Student

鎌田千佳 (千葉敬愛短期大学)

KAMADA Chika (Chiba Keiai Junior College)

(キーワード)

イメージ、ピアノ、表現、きっかけ、総合表現の可能性

1. はじめに

本稿では、数年来ピアノ個人指導の中で活用している「楽曲から何かイメージを持ち演奏する」という指導に、これまでになく敏感に反応した学生の事例を報告するとともに、その活用効果と、総合的表現活動の可能性について考える。

2. 「イメージを持つこと」の提案

ピアノ課題曲を練習する際、学生には常に自ら出す「音」を聞き、どのように「音楽」を表現したいかを意識してもらうために、課題曲のレベルやピアノ習熟度に関係なく次のように提案している。

- ① 音符、強弱記号、発想記号、演奏記号など、楽譜に書かれているすべての要素から何かイメージを持ち演奏する。
- ② 曲全体から自らのイメージを持ち演奏する。
この2つは技術習熟度は関係なく、ほぼすべての学生がそれなりに反応する。
- ③ それぞれの要素からのイメージを総合的に構成し、曲全体で一つの物語を作り出す。
この③まで反応した学生の事例を報告する。

3. 事例と考察

- (1) Tさん：5歳から8年間エレクトーンを経験
中学の吹奏楽部でトロンボーン担当、
- (2) 課題曲：ブルグミュラー25の練習曲より
第15番「バラード」

(3) 物語のタイトルとイメージのきっかけ

次の順に変化した。(全4週間)

- 1：夜の海で misterioso の言葉から
- 2：宇宙の神秘 30小節目の和音の響きから星をイメージ
- 3：雲と一緒に 1～2小節目右手の和音から風をイメージ

1小節目から最後96小節目までフレーズ毎に詳細にストーリー展開を言葉にしている。(当日発表)

タイトルとストーリーの変化の根拠として、正しいピアノ奏法のテクニック習得が考えられる。これまで漠然と感じてイメージしていたものが、正しい技術習得により、楽譜から読み取れる要素が増え、音の表現力が広がり、それにより音楽の表現の可能性が増したためだと考えられる。これはそれぞれのきっかけとなる要素からも確認できた。

4. 最後に

イメージを持って楽曲と向き合うことの効果は確信できている。この事例の学生がもったイメージは、自然科学的な個性があり魅力的である。これは彼女のこれまでの多様な経験からくるものではないか。また、今回のように、楽曲から言葉がでてきたことにより、さらに視覚的表現として造形、身体表現への発展、総合表現の可能性を感じている。